

飛鳥

2015年

深秋号

第 188 号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail: info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



霜柱

霜の畑腰折る婆の頬被り

小林 幸代 作

『藍生高知 かんざし句会句集 第5集』より
(5頁に詳細)

日本各地から初霜の便りが届きはじめました。
遅れてやってきた金木犀の香りは足早に去って、高知の
短い秋はいよいよ濃く深まり、冬の仕度がはじまります。

いろいろかいろう 夫	2
あすへの歩跡 7	3
出版室だより	4
文章カレベルアップ講座 (17)	6
キルギスタンからコンニチハ 64	7
おのころじま奮染記 6	8
催し物案内板	9
わが家の太郎 35	10

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

いんち がいろ

その十六

まだらの紐

安藝眞一

中学に入っただばかりの年の暮、放課後、家に帰るや否や、鞆を抛り出して竹箒しごき折り、竹刀に見立て、小脇に抱え走り出す。行く先は級友「N」との果し合い。樹の枝を振りかざしてNが打つてかかる。お互いに腕に自慢の心地で切り結ぶ。丁々発止、とどまる事なくNの家の中水道から西に走り、小津神社を越え、夕陽に赫い城北町の街道を西へ西へと切り結び転がり走り抜く。万々分岐北の稲刈りの終った田にNが飛び降りて正眼の構え。私も身体を投げ出す様に刈田に飛び込んだ。途端にこれは、一乗寺下り松の決闘の場と思い当たる。水田の畦に立ち

て向かい合うお互いいずれも宮本武蔵の心持。頃合いをはかり振りかぶった私の一撃を発止と受け止めたNが声を放つ。「あ、いかん。こんな事しよつたら間に合わん……」私が慌て、「え？ 何？」と問うにNは木刀を打ち伏せ乍ら「まだらの紐」の最終回よ」と云う。「あ、いかん」と私も飛び上って竹刀を置く。まだらの紐とはこのころNHKから放送されていたシャーロック・ホームズの連続ラジオドラマの一つで、ことにこの「まだらの紐」の謎は圧巻の面白さ、その最終回が今夜間もなく放送という事。聞きのがせぬ二人の思いはチャンバラの中止となり畦の水で木刀を洗ううち、つるべ落しの秋の陽に手元も見えぬ暗がりに「いかん」とNが「これから家に帰りよつたら放送に間にあわん」と声を絞る。咄嗟に私は答えた。「ほんならMの家で聴かして貰おう」Mは中学で知り合ったばかりの級友で家はこの刈田の近くの筈であった。手足洗った二人がたずねる新屋敷のMの家。呼鈴押して訳を話すとMは笑って招き入れてくれる。応接間にラジオを運んで来て絨毯の上へ。「まだらの紐、最終回」胸が高鳴るナレー

ションと共に放送がはじまった。ラジオにしがみ付く。声を呑む場面の展開と恐怖の連続のうちに最終回は茫然と終った。

恐怖に張りめぐらされた満足感で玄関に出る。と、Nが不意に「帰るのが怖い。まだらの紐思い出したら歩けんかも知れん」突然の弱気に私も驚いたが気持は同じで背が冷えた。家主のMは笑って「ほんなら僕が送っていちゃろう」と云う。元氣取戻したNを私とMで挟んで夜道に踏み出す。暗がりの道を東へ東へ歩き続けた。中水道の光が見えて来た。急に饒舌になったNはニコリと笑って近寄った家に横あいからするりと入った。二人になった。これからMは引き返して独りで帰る事になる。Mは西へ私は東へ。歩きはじめると急にMは「よう帰らん！ 独りで帰るのが怖い！」と云い出す。思い余った私がNを呼出して相談すると「ええッ？ よう帰らんなら俺が安藝君と送っていちゃろう」とNの兄が飛び出して来た。行きがかり上、巻き込まれた私と兄がMを挟んで今来た道を又西へと歩き出す。億劫な足どりに一足毎に寒さがしみ透る。城北町を遡り線路を越えて新屋敷に折れると元

気になったMが玄関にすべり込む。Nの兄と私と二人きりになった。今度はどうあっても二人きり、今来た道を三度目に歩き出す。降るような星空になった。西の山からおろす風も田を渡る風も冷え込んで来た。灯の消えた店ばかり続く道で突然カン高い声が暗闇に飛び出した。見ると一軒だけ晩い仕舞の仕出屋の裸電球の下をホースの水が打ち鳴らしている。手伝いの女の話声もこの夜気の中では暖い。Nの兄の家が近づいて来る。少し上気した兄が「ほんじゃあ」と私に笑いかけて家の中に入る。

独りになった。どこかで犬の聲がして首筋にまだらの紐のことが思い出される。暗らがりの街に外灯が一つ。近寄るだけで恐怖がやわらぐ。走るように歩くと大通りの街灯が明るく胸のふるえを押さえてくれる。交差点から斜めに見える我家が暗闇に坐っている。手さぐりで裏門にまわり勝手口の引き戸を開け、すべり込んだ途端に安堵がドツと来てへたり込む。風呂桶の湯は流石に冷えてぬるくなっていた。ともかく湯舟に身を沈めて、震えながら、今日の夜道の徘徊を追って想い出していた。了

あすへの歩跡

7

大澤重人

小六で初めて筆を握った。三十歳の若き校長に勧められた。あれから六十六年。しかし「書道を一生続けるとは思っていなかった」。

小学校教員を志望し、高知大教育学部に進む。書を勧めてくれた校長へのあこがれがあった。四年次に教育実習をする。困ったことに、ピアノを弾きながら歌って指導するのが、小学校教員の必修条件だった。入門教材のバイエルにも取り組んだが、「俺にはむかぬわ」。書道の教員志望に切り替え、国語の免許を取る。指導教員の影響で、体育の免許も取る巡り合わせになった。

(3) かわら版

一九六三年に卒業。高知学芸高・中で書道教員に就くはずが、ベテランの書道の非常勤講師が二人いた。他教科の免許があるのを知って、学校側は「当分の間は国語と体育も教えてください」。新学期直前に辞退し、中土佐町の中学校で体育主任を務めた。一年後、学芸から再び声がかかる。講師二人

は退職して、晴れて書道での採用だ。「私以上に書ける生徒がいて、負けたらいかと一生懸命やりましたよ」。回り道をしたもの、ようやく書の道へ。

高知大時代に生涯の師との出会いがあった。学内で書道を唯一教える松岡雲峰さん。他の系列の書家の作品も学ぶよう指導を受けた。「古典と比べて、ここはこうじゃないね」などと、ソフトに自ら気づくよう導かれた。大学四年の若さで雅号をつけることになり、三つの候補から選んだのが「祥雲」。師匠の「雲」をいただいた。県内にも先例がある名前

内なる思いを文字に託す

書家(県展無鑑査)、毎日書道会総務・審査会員 大野祥雲さん(77)



おおの・しょううん

仁淀村(現・仁淀川町)生まれ。高知大教育学部卒業。高知学芸高・中の教諭などを経て、1975～2000年、高知大教育学部で書道の教員に。現在は名誉教授。毎日書道会総務・審査会員。本名は定男。高知市在住。【写真:自作「含氣」の横で】

だったが、師匠は「競争しなさい」。一九七五年から高知大助教授に。定年を迎えた師匠の後継に公募を経て選ばれた。「よっぽどやらないとダメやろ」。プレッシャーを感じながらも筆に力を込めた。七八、八三、八七年と県展の特選に三回入り、無鑑査に。師匠が始めた筆の友書道会(会員約五〇〇〇人)の会長を師匠の死後に引き継

いだ。県内有数の書家の地位を築いた今も、偉ぶらない紳士だ。書くときは「狙いを定めます」。何という文字を書くのか。字の成り立ちを調べる。濃墨か淡墨か。どういう造形にするか。七〇％はこの準備段階で決まる。文字のヒントは、新聞などから得る。昨年は火山の噴火事故が続き、今年一月の県展書道無鑑査展には「鬼」を出品した。

書は一筋縄では行かない。「書いて書いて最後に書いた物が良いか」というとそうじゃない。今も自信がついたというには、「なかなか」。書の道はそれほどに遠い。書の面白さ。「自分の内なる思いを、文字に託して表現できること」。取材日に高知市の「かるぽーと」で筆の友書道会展が開催中だった。会場の中央に、薄い墨がにじむ力強い二文字が白い紙に収まっていた。

「含氣」

おおざわ・しげと

毎日新聞大阪本社編集局編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。最新刊「泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡」。

※最新刊については次頁に詳細掲載。

「あすへの歩跡」連載中大澤重人さんの最新刊

『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡』

高知市在住の高橋いと志さん（95）の一代記。看護婦として日本の旧陸軍と中国の八路軍で従軍し、外地での生活は十一年に及んだ。

「覚えとるんと違う。忘れられんがよ」というほどに壮絶な体験をユーモアをもって朗らかに話すのは、「生」に対する感謝があるからだろうか。聞き取りを軸に、高橋さん自身が書いた昔の原稿と数々の文献からの言葉を丁寧に織り込んだ一冊。ひとりの人生を通して戦争の姿が見える。

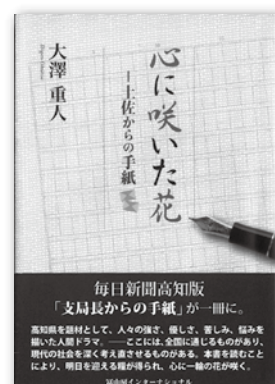
四六判 269頁 定価…本体1,800円（税別）



大澤さん、高知愛の原点

『心に咲いた花―土佐からの手紙』

四六判 293頁 定価…本体1,800円（税別）



出版室だより



花ごよみ 三宮洋子 2016 カレンダー

傘寿の記念に、10年前から習い始めたファンタジック水彩画のカレンダーをつくりました。

A4判 28頁（表紙込み）
頒価：未定



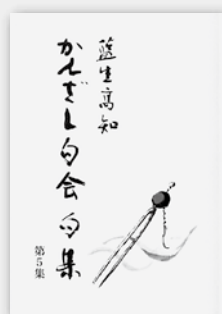
2016年1月～2017年1月に対応
あると便利な六曜つき

価格表示のあるものは販売しています。

大澤さんの著書は書店や Amazon などからご注文ください

『かんざし句会 句集 第5集』

藍生高知



A5判並製本 126頁
頒価：1,600円

『句集「きずな」』

窪内 義晴



A5判上製本 252頁
私家版

藍生高知かんざし句会発足二十年を記念した句集です。第4集発刊後二年間の句会で詠んできた作品から自選。また、俳句に寄せる想いを会員それぞれが綴った短いエッセイも併せて掲載しています。

退職後、数々の習い事に挑戦してきた著者が、人生のひとつの節目として川柳と水彩画を一冊にまとめました。日々の暮らしから生まれる川柳に思い出の風景を描いた絵画作品が彩りを添え、互いを引き立て合う作品集です。

『こんな時だからこそ 歴史と憲法は私の友達』

田所 金久



A5判並製本 192頁
私家版

傘寿を迎え、資料整理と若干の資料提供のため、過去の文章からいくつかを選び編纂。五十五年間の教壇生活を振り返った自分史や、戦後から今日そしてこれからの日本を歴史・政治・経済など多角的な視点から読み解いた散文など。常に知的な刺激を求め、深く考察する実直な姿勢が窺えます。

『月の谷のサボテン』

町田 樹生



204×210上製本 44頁
定価：本体1,200円(税別)

いの町出身の油絵作家・町田樹生さん待望の絵本が完成しました。三作目となる今回のテーマは「地球環境」。

慎ましく暮らしていた「プレム」とシナモンでしたが、シナモンが突然原因不明の体調不良に陥ったことをきっかけに、病を治すサボテンを求め、プレムは月の谷へ向かいます。

自然界のバランス、自然と共存共栄するために必要なことは何か。旅の中で訪れる数々の出会いを通して、やさしく説いてくれる一冊です。

『科学研究最前線』

土佐で夢追う研究者たち
高知大学化学系教員



A4判並製本 132頁
定価…本体1,400円(税別)

高知大学化学系教員による最新の研究を分かりやすい内容、表現で紹介した講義本。しかし単なる講義本としてだけでなく、知的好奇心を刺激する読み物としても楽しめる一冊となっています。現代において化学研究というものが如何に幅広い分野に関係しているのかを知ることが出来、化学研究の面白さや奥深さについて気づかされます。特に若い世代に読んでもらうことで、これまで以上に化学研究へ興味を抱き、明日を担う化学研究者への道を志してほしいものです。



みずき・わか
高知市在住。フリーライター、生涯学習コーディネーター。文章教室や漫画の原作教室など高知市を中心に開催している。

印象を定着させる タイトルの付け方

水木和香

タイトルは人を引き付け、また読みたい気持ちにさせるための、大切な第一歩です。文章全体を象徴するような風格のある命名が望ましいのですが、なかなかすんなりとは出てこないもの。ましてやそれで第一印象が決まるとなれば、プレッシャーを感じる方も多いはずです。

↓付けてから書くか、書き上げてから付けるか

タイトルが先の方が、書いている途中で内容がぶれたり、テーマから逸脱することが少ないので、きちんとした作品に仕上がります。けれどもタイトルを決めるだけでエネルギーを使ってしまう、筆が進まないのも困ります。仮のタイトルを付けておき、書き上げてから再吟味しましょう。

仮のタイトルは主人公の名前、話の中で重要な意味を持つ物、最も印象的な一瞬を表現する言葉などを採用します。ただしテーマをそのままタイトルにしてはいけません。

↓短いタイトルと長いタイトル

好みがありますが、短いタイトルの方が象徴性が高く、覚えてもらいやすいというメリットがあります。

ます。やたら長いのもユニークですが、表題をデザインする時などに手間取るので、実はあまり歓迎されません。略称にされてしまうことも多く、思い入れはそれほど反映されないようです。

↓タイトル被りは避ける

たまたま「雪国」というタイトルを付けたとします。しかし読み手は無意識に川端康成氏の名作を思い浮かべてしまいます。有名な作品ではないとしても、後の方が圧倒的に不利です。インターネットなどで検索するか、図書館で調べるなどして、既に使われているタイトルと被らないように気を付けましょう。

↓苦しい時はアレンジで

どうしても名案が浮かばない時は、仮タイトルをアレンジして正式タイトルにします。仮タイトルが「明子」だったとしたら「明子へ」「明子だから」「明子のために」といったふうに。また「物語」「日記」「時代」「伝説」といった常套句を付け足す方法もあります。

映画や曲のタイトルをもじったり、事件やニュースの言葉を取り込むのも一つの方法です。

雑書キ

友人と「高知には社長さんが多い」という話になった。土曜の夜の追手筋で「よ！社長！」と叫ぶと、あちでもこちでもその声に振り返る人影があるという。その話の真偽のほどは別として、高知県は小規模事業者が多く、それ故に経営者が多いというのは事実らしい。飲み会の席で隣になったのがどこかの社長さんだった、というのは高知ではよくある話である。

先日とある仕事で、いくつかの中小企業に訪問し、お話を聴く機会があった。熱い熱い思い入れ、どこまでも問題を突き詰める探究心。ギョツと詰まっていたキラリと光る、そんなカッコイイ企業ばかりだった。経営者や開発担当の方から直接お話を聴けたもんだから、その熱量たるや！なんとも貴重な経験となった。

この度参加した「ものづくり総合技術展」には、県内でもものづくりに携わる122の事業者が集っていた。(会場の様子は9頁をご覧ください)パラエティに富んだ内容に、高知でこんないろいろなものが生み出されているのか！とワクワクした。今年は終わってしまっただけで来年。ワクワクを探しに来てみてください。(上)



うじはら・なみ
高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギスに在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

天災の記憶、人災の杞憂

氏 原 名 美

九月十日の朝、ニュース・サイトを開いて驚いた。栃木と茨城に特別警報が出され、予報官が「これまでに経験したことのない大雨、重大な危険が差し迫った異常事態だ」と言っている。新聞のデジタル記事を読むと、五十年か六十年に一度の記録的な豪雨だとある。

子供の頃、夏の記憶といえば集中豪雨と台風、それに土砂崩れと冠水した田んぼだった。父と一緒に家の窓から仁淀川の濁流を眺めたのが初めて実感した「タイフー」だ。随分あとで、それが伊勢湾台風だったと聞かされた。

それから、第二室戸台風をはじめ大きなのが毎年やってきた。昭和三十八年の台風九号は県の中西部に大雨を降らせた。雨は長時間降り続けた。仁淀川がどんどん膨らんで沈下橋が文字通り濁流に沈んだ。家の近くにも水が迫ってきている。平屋の我が家は布団も本も家の中の一段高い場所へ運び上げるしかない。母が「ランドセルに『夏休みの友』を詰めなさい」と言う。もしもの時に背負って逃げたいのは夏休みの宿題帳などではなかったが、逆らえる雰囲気

気ではない。お腹に二人目がいたからだろうか。台風も去り、宿題帳の頁が残りわずかとなった頃、弟が生まれた。私は小学三年生だった。

当時はテレビやラジオで今ほど頻繁な気象情報があったわけでもなく、ダム放水を知らせるサイレンは鳴るが、町役場から避難勧告が出されることもなかったように思う。大人は経験を頼りに自分自身で判断し行動していた。子供は、町がなんともなくても奥の地域で大雨だということには、川のそばに近寄るなど言われたものだ。

私の育った町は仁淀川の中流地域で、四、五十年前までは低地に広がった田んぼが遊水地の役割を果たしていたから、家が立ち並んでいるところはせいぜい床下、運が悪くても床上浸水の心配をしていればよかった。だが、親や祖父母に教わった災害への心構えは、所詮、限られた狭い範囲の知恵でしかない。大雨のたびに仁淀川の洪水は警戒しても、山崩れがいに恐ろしいものか、昭和四十七年の繁藤災害まで知らなかったのだから。

鬼が怒るような川ですごくいだろ

うな、と地理の時間に想像した。発音からすれば当て字の可能性大であるけれど、荒川という名の流れが日本各地にあるように、山や川の名前には自然に対する人々の畏怖の念が見える。

常総市では堤防が決壊し人も家屋も流された。市の避難誘導に不手際があったと報道されたが、人的被害が驚くほど少なかったのは半世紀前に比べて格段に進歩した情報伝達と避難指示のおかげだ。今後はさらに自治体の枠を超えた防災体制が整備されていくだろう。天災は必ず来る。だから、あらゆる状況を想定した避難訓練が欠かせない。

ところが、うちの大学は避難訓練をしたことがない。玄関ホールの大階段と通用階段の他、四階建て校舎の両端に避難用の階段があるが、扉は施錠されていて非常階段の用をなさない。施設管理担当の副学長に「火事の時はどうするの?」と聞いたら、「地震や火事は減多にない。盗難防止が最優先」と、扉の張り紙を指差した。「鍵は一階警備員室」とある。我が学部は三階だ。まさかの時は、覚悟を決めるより外ないようだ。

6. 野原の花たち

葛に限らず、雑草たちは、春になると勢いよく生え茂って、冬枯れするまで止まらない。野の道を埋め、畑の作物にも襲いかかる。農家が

力鎌で刈り上げてある。薊やつりがねにんじんが、丁度、花を咲かせようと蕾の茎を伸ばし始めた



頃、土手全体は土が見えるほど、短く刈り取られるから、気高い薊の姿やつりがねにんじんの可憐な淡紫を楽しむにしていたばくは、がっかりさせられるのだ。おひやくしゅうさんは、あまりにも草のことを知らな過ぎる。例えば、秋

農業は忙しい。それに専業でも兼業でも、経営や経済的な知識を得るための勉強が必要なのかも知れない。だから、野草たちが、何時花を付け、実るかなんて知る余裕はないのだろうか。しかし、野菜も稲も植物であることに変わりない。そんな生きものの、愛情を持つなら、農薬（殺虫剤、除草剤）の使用にも、心くばりがされない

いだろうか。何時草刈りをすれば、一番効果的かを知れば、何度も不必要な除草剤の散布や動力鎌の使用をすることもないはずだ。美しい花の咲く野草にも、心を和ませることのできるのではないか。

もしも、秋の七草を愛でるおひやくしゅうさんが増えるなら、動力鎌の爆音が、少し減るかもしれない。

たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）
大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごし、
美術大学染色科専攻科修了。一九
そうべえ』で第一回絵本にっぽん賞、『
とまだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

催し物案内板 <11月～2016年1月>

第33回 高知大学吹奏楽部定期演奏会

と き 11月15日(日)
ところ 高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
開館時間 開場 17:00/開演 17:30
入場料 無料

企画展 ひよこの灯

と き 11月21日(土)～2016年1月11日(月・祝)
休館日 毎週月曜日(祝祭日の場合翌日)
開館時間 9:00～17:00(最終入館 16:30)
ところ 越前町立横倉山自然の森博物館
入館料 大人 500円、高校・大学生 400円、
小・中学生 200円
(各20名以上の団体 100円引き、70歳以上 250円、
身障者手帳をお持ちの方は無料)

関連イベント

- ☆クリスマスワークショップ～自分だけの灯を作ろう～
12月19日(土)
- ☆クリスマス水庭イルミネーション
12月22日(火)、23日(水・祝)
※夜間開館 21:00まで(最終入館は20:30まで)

第44回 高知大学合唱団定期演奏会

と き 12月12日(土)
ところ 高知県立美術館ホール
開館時間 開場 17:30/開演 18:00
入場料 500円

平成28年 県展書道 無監査展

と き 2016年1月4日(月)～10日(日)
ところ 高新画廊
開館時間 10:00～18:00(最終日は17:00まで)
入場料 無料
※「あすへの歩跡」でご紹介した大野祥雲氏も出品されます

高知学芸中学高等学校マンドリン部 第55回 定期演奏会

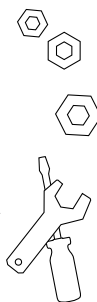
と き 2016年1月6日(水)
ところ 高知県民文化ホール(グリーン)
開館時間 開場 13:30/開演 14:00
入場料 無料

高知学芸中学高等学校コーラス部 第21回 定期演奏会

と き 2016年1月10日(日)
ところ 高知県民文化ホール(オレンジ)
開館時間 開場 17:30/開演 18:00
入場料 300円



第4回 ものづくり 総合技術展 出展報告



10月29日(木)～31日(土)に高知
ぎばさんセンターで開催された「もの
づくり総合技術展」に参加しました。
ARと「動く印刷」を広く知っていた
だくことを目的とした内容で、今年は
クロマキー合成や3D映像も加わりパ
ワーアップ! 世代を問わず多くの方
が足を止めてくださり、ARを体感して
いただきました。ご来場ありがとうございました!

印刷屋さんの 「すったもんだ」

代表取締役社長 永野正将



10月の半ば、所属している「高知県中小企業家同友会」の県例会において、「突然の事業継承と自己変革〜2代目社長の奮闘記〜」という60分間の報告をさせていただきました。

報告にあたって、創業からの経緯や父の想い、父と自分との違い、兄弟のこと、家族のこと、そして飛鳥のこれからについて様々な事を深掘りし、考えることができ、より明確なビジョンや方向性を掴むことができた。

自分自身、経営者としてまだまだ半人前ではあるが、素晴らしいスタッフに恵まれている。お客様や関連する多くの皆様のご支援のもと、飛鳥はこれからも一丸となって「良い会社」を目指していきます！
これからも末永くよろしくお願いいたします。



わが家の太郎 ③⑤

おから

永野 雅子

この夏の日曜日、今日は外出の予定もないし、太郎の散歩もフルコースで行けると、久しぶりにゆったりとした気分でしたところ、何やら庭で変な音がする。

見ると、太郎が駆け回りながら顔を地面にこすりつけ、うめき声をあげている。いつもの皮膚病のようだ。

夏のはじめにお薬を貰ったばかりなのに又かと、こちらももうんざり。

とは言え、そのままにしておく訳にもいかず、車に乗せて医院へ。

例の如く、よその犬や猫はおとなしく飼い主と一緒に待っているのに、太郎は足を踏ん張って中に入ろうとしない。仕方なく順番が来るまで車内に置いて、呼ばれたら私が抱いて中へ。それでも足をばたつかせて抵抗する。待合室の大型犬がびっくりしたような顔で見ている。犬にも恥ずかしい。

やはり小麦アレルギーで、歳がいくほど出てくるらしい。

今日はいつも食べさせている、皮膚病に良いというドッグフードとおやつを持参した。

先生に見せると、

「これは全部だめです。でんぶんや、糖分を含んだものは食べさせないほうがいい。すべて手づくりにして、鶏肉と野菜を五品ほど蒸したものに、量を増やすためおからを入れたらいいでしょう。おやつは鶏のササミを薄切りにして、オーブンで焼くと出来ます」とのこと。トホホ。

早速材料を買って帰り、小口切りにして、ボウルに山盛りのそれらを圧力鍋で蒸し、出来上がったものを袋に入れて冷凍室へ。ただ、おからは全部入りきらなかったため、少し残った。

食べてくれるか心配したけれど、べろり平らげてまだ欲しそうな顔。



また、びょういん
いやだなあ...

やれやれこれで当分は大丈夫。
ところで残ったおからをどうしよう。

しばらく考えて、「豆腐バーグ」ならぬ「おからバーグ」を作ることにした。

レシピ本を片手に出来上がったものを、あんかけにして食べてみると、意外においしい。これは思わぬ副産物。残りは冷凍していつでもチンをすれば間に合う。

太郎のおこぼれが私の食事になるとは、いささか面白くないけれど、この暑い中、台所で孤軍奮闘、決してお安くはない野菜を大盛り調理することで、いつも放ったらかし気味の太郎に少しは罪滅ぼしになるかしら。

因みに冷凍室は、太郎と私のおから料理で満杯。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役